

鹿児島大学地域防災教育研究センター・日本地形学連合
一般公開シンポジウム「霧島山の火山ハザード-2011年を事例として」

日時：2015年10月11日（日）13:00～17:00

会場：鹿児島大学（〒890-0065 鹿児島市郡元1丁目21-40）

稲盛会館（キャンパスマップの「郡元キャンパス」参照）

メモリアルホール：一般研究発表（口頭）・一般公開シンポジウム

主催：鹿児島大学地域防災教育研究センター・日本地形学連合

内容

司会：下川悦郎・岩船昌起（鹿児島大）

13:00-13:05 開会挨拶 浅野敏之（鹿児島大）

13:05-13:40 小林哲夫（鹿児島大）：霧島火山の防災マップと新燃岳2011年噴火

13:40-14:10 磯望（西南学院大）：霧島火山2011年噴火後の降下テフラと河床地形の変化

14:10-14:45 地頭菌隆（鹿児島大）：霧島火山地域における土砂災害

14:45-15:15 原田智史（鹿児島地方気象台）：霧島火山2011年噴火における気象庁の防災対応

15:25-16:55 総合討論

16:55-17:00 閉会挨拶 倉茂好匡（日本地形学連合会長）

趣旨

2014年9月27日の御嶽山噴火災害を機に、わが国の活火山の監視・観測体制および噴火に対する警戒避難体制の見直しが行われ、火山噴火予知連絡会が選定した47火山を中心に早急な改善・強化が図られることとなった。その47火山の一つである霧島山では、20を超える火山体が識別でき、2014年10月24日に硫黄山で火口周辺警報が発表されるなど、特に、御鉢、新燃岳、硫黄山、大幡山などで近い未来の噴火が懸念されている。このように潜在的に噴火の危険性高い火山体の集合である霧島山では、2015年7月8日の「活動火山対策特別措置法の一部を改正する法律」の公布とも関連して、火山防災対策、火山監視・観測体制、火山防災情報の伝達、火山噴火からの適切な避難方策、火山防災教育や火山に関する知識の普及、火山研究体制の強化などを総合的に強化する必要がある。

新燃岳では、2011年1月26日に噴煙が3000m上空まで上がる噴火が確認されて以来、2013年10月22日まで噴火警戒レベル3が継続され、新燃岳周辺約3kmの範囲が立ち入り規制された。この間、1月26～29日に風下の東南側山麓を中心に降灰が及び、道路や観光施設の閉鎖や学校の休校や農作物の被害などが生じた。また、2月1日の爆発的な噴火では火山弾が新燃岳から約3.2kmまで飛来して直径6m深さ2.5mのクレーターを形成して、

立ち入り規制が約 4km まで一時拡大された。そして、梅雨期には降灰が及んだ山地斜面で土石流の発生が懸念され、砂防施設による緊急減災対策等もなされた。

この 2011 年新燃岳噴火に係わる一連の自然の動きおよび災害、そして災害対応については、約 4 年を経た現在までにさまざまな分野で研究がなされ、調査研究データに基づきその実態が解明されてきた。本シンポジウムでは、火山地質学、地形学、砂防学、火山物理学の視点から多角的に考察し、特に火山災害およびそれに起因して生じる土砂災害に係わる自然特性に注目して、今後、霧島山で想定される火山噴火に係わる多様な災害の可能性について市民とともに議論する。